



## 東京農大経営者大賞（上）

東京農大は、実業界で活躍する校友（OB）を顕彰する「東京農大経営者大賞」制度を設けている。2008年の第9回大賞に輝いた4氏は昨年末、世田谷キャンパスで開催されたフォーラムで記念講演を行った。その業績と講演要旨を2回に分けて紹介する。

### 障害者の自立を目指して

いけがみ ちえこ  
**池上 知恵子さん**

有限会社ココ・ファーム・ワイナリー専務取締役

1950年代、中学校教師だった父が特殊学級（特別支援学級）の生徒たちを指導して、急斜面の土地を開墾してブドウ畑を作りました。それから50年。おいしいワイン造りに、知的障害のある人たちが働いています。

有限会社を設立したのは、社会福祉法人では酒類製造の免許は頂けないからです。東京農大で醸造の基礎を学び、1984年の私が卒業の年に、会社に果実酒の製造免許が下りました。

学園の園生たちが作ったブドウを買い入れ、ワインの製造・販売を行い、瓶詰め、ラベル貼りなどは学園に業務委託しています。学園という大きな家族と一緒に、ワイン造りをしているのです。全国各地の特別契約栽培農家の方々の協力も得ています。



1972年東京女子大社会学科卒。84年東京農大短期大学部醸造科卒。栃木県足利市の社会福祉法人「こころみる会」理事。ワイナリーは、社会福祉施設「こころみ学園」との連携で、ブドウ栽培、ワイン製造を行っている。

障害者の自立とは何だろうとよく考えます。会社に勤めて給料をもらってということだけではない。自分の仕事に誇りと責任を持つこと、それこそが自立ではないでしょうか。

農業や微生物にかかわる仕事は、ますます重要になります。良いワインとは、複雑で、バランスが取れていて、味わいが長いといわれます。熟成という、人間の力にはどうにもならない、時間だけが作ることでできる味わいもあります。このことに、自然との共存、持続可能な社会のあり方を思います。

今、学園の園生の平均年齢は51歳です。これからも、自然のなかで、知的な障害を持つ人たちが、仲良く、安心して、穏やかに、そして誇りを持って暮らしていけるように、努力していきたいと思います。

### やんばるの活性化に尽力

おぎどう もりひで  
**荻堂 盛秀さん**

やんばる物産株式会社代表取締役社長

沖縄北部のやんばるとは、「山の原」、つまり田舎という意味です。その自然豊かな地の農家で生まれ育ちました。大学卒業後、しばらくは関東で土木関係の仕事に就きましたが、郷里に帰ってからは大学の専攻とは違う道に入りました。

商工会青年部では、若い者の力で地域活性化をと、77年に名護の夏祭りを企画しました。すべて手作りの運営で見事に成功、今では沖縄全域で夏祭りが定着しています。

そのうち地元の商工会長に据えられて、ますます地域活性化にのめりこむことになりました。地域の農産物や特産物の販売施設を模索して、国や県に働きかけているところ、折しも建設省（当時）が「道の駅」構想を発表しました。

そこで、第三セクター法人として92年に設立した



1965年東京農大農学部農業工学科卒。75年以降、沖縄県名護市で食品や不動産関連の企業を設立。商工会青年部活動などで、地域の活性化に尽力。現在、沖縄県商工会連合会会長。

のが「やんばる物産株式会社」です。そして94年には、沖縄で第1号の「道の駅」に認定されました。周辺からは、こんな辺鄙な地で大丈夫かという心配、批判があったのですが、自分自身を信じて、推進してきました。

パイナップルやマンゴーなど、豊かな熱帯の果物の産地です。シークワサーなど人気の作物を全国に発送もしています。当初17人だった社員は今では40人ほどになりました。年間の利用者は約150万人、売り上げも右肩上がりです。約9億7千万円に達しております。地域の農林高等学校、県立農業大学校とも連携、生徒や学生が作った野菜や果物も扱っています。

「生産者と消費者の架け橋に」をモットーに、地域産業をいかに発展させるか、社員一丸となって、取り組んでいます。